名も無い物語４

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名も無い物語４

【Ｎコード】
Ｎ６２３９Ｂ

【作者名】
春功

【あらすじ】
思い出、それは人の中の名も無い物語。その物語を心に積むことにより、人は絶望から這い上がることができるのだ。悲しみ、苦しみ、愛を知った人間は、一体次に何を知ったのか？一人の人間、宏介の思いを綴った、思い出の物語。ノンフィクション第四弾が静かに幕を上げる。

（前書き）

人間はどこまで、もろいのか？

ちらちらと、雪が降っている。
手をかざす僕は、泣いている。
「…消える」
手についた雪は、見るもなく、溶けていく。
「……っ」
こんなに簡単に消えられれば、どんなに楽なことだろう。
灰色の雲からは、光は見えない。
「……くっ」
雪が冷たくない。
さわっても
さわっても
さわっても
冷たくない。
かじかんだ手を、震えながら見つめる。

「……いらない…か」

そう言われて、実感など湧(わ)かなかった。

ただ、悲しみだけが襲ってきている。

お前なんか…

その先の言葉を続けられない。

言われた言葉なのに。

ただ思い出しただけなのに。

それなのに、その一言が、自分の全てを喰い散らかす。

「…そっか」

悲しみが消えない。

どんなに、その言葉を否定しても、逃げられない。

雪が降っている。

思いたくなかった。

自分の存在が、無い、なんて。

思いたくもなかった。

『お前はいらない』

なんて。

（ああ、くそっ）

そうだよ。

認めたくないだけだったんだ。

「僕は…」

光は見えない。

「必要なかったのか…」

知ってたんだ。

そんな事。

いつも考えてた。

自分が必要なのかどうか。

でも、がんばろうとしたんだ。

少しでも、皆のようになりたくて。

だけど、できなかったんだ。

もう、遅い。

もう僕は、いらない。

「いらないんだ」

肩についた雪を、払う。

ついでに頬についた悲しみも。

上を見ると、灰色の雲。

そこから、希望は見えそうにない。

なぜなら、僕がいるところは、先が見えない、暗闇にいるのだから。

（後書き）

自分を失い、彼に残ったのは思い出だけ。名も無いもの、のみ……

続く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6239b/

名も無い物語４

2010年12月14日21時10分発行